大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

19世紀末から20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容：夏目漱石の「英訳方丈記」を手がかりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: プラダン, ゴウランガ・チャラン メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004271

19世紀末から20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容
―夏目漱石の「英訳方丈記」を手がかりに―

プラダン・ゴウランガ・チャラン

はじめに

『方丈記』の受容に関してこれまで数多くの研究がなされてきたが、そのほとんどは本作品を「国文学」という枠組みの中に捉え、国内におけるその受容の諸相について論じたものである。本作品の海外における受容については、その外国語訳を対象にいくつかの研究があるものの、いずれもいわゆる原典と翻訳という比較検討の観点から論じるにとどまっている。本稿で取り上げる夏目漱石の『方丈記』英訳に関しても、作家以前の漱石にとってこの作品がいかなる存在であったのか、漱石研究の視点から考察したものが多い[1]。これらの先行研究に対し、本稿は『方丈記』を「世界文学」として捉え直し、本作品の従来の受容方法を念頭におきつつ、19世紀末から20世紀初頭の英米でこの作品がいかに受容されたのかを明らかにする試みである。

文学研究者のデイヴィッド・ダムロッシュ（David Damrosch）は、世界文学を次の通り定義している。①発祥地の言語と文化を越えて外国文化に迎えいれられ、②翻訳などを通して豊かになった作品のことであり、③一方でその受容過程においては、読者が原典から一定の距離を取りつつ、その作品に対して対峙的な姿勢を示す場合が多いと言う[2]。すなわち、世界文学とは、翻訳などを通してある国民的な文学空間を超えて他国の文化的な空間の中で読まれた文学であり、海外の読者から対峙的な姿勢が示されることが多いと指摘している。また、ダムロッシュによれば、世界文学に組み込まれる過程の中で、作品は真正さや本質を失うのではなく、むしろ多くの点で豊かになる。そのた

1　漱石の「英訳方丈記」を中心に下西善三郎による一連の論考の他に次のような研究が挙げられる。今西順吉『漱石文学の思想　第一部』（筑摩書房、1888、231-238頁）。森川隆司「英訳方丈記 ―漱石、ディクソン、そして熊楠」（工学院大学共通課程研究論叢（30）、1992、125-136頁）。松本寧至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐって：漱石と長明」（大学院紀要13、1999-03）、3-26頁。増田裕美子著『漱石のヒロインたち ―古典から読む』（新曜社、2017年、123-128頁）等。

2　デイヴィッド. ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（秋草俊一郎他訳、国書刊行会、2011、432-460頁）。

め、作品の本質や作者の意図を模索するよりも、個々の作品が世界文学の仲間入りをするプロセスの中で特定の状況によっていかに変容を遂げるのか、その要因と過程を追求することが大事であると主張している[3]。本稿は、このような概念から着想を得て、『方丈記』が世界文学へと組み込まれた過程を明確にすることを目指している。具体的には、明治中期に夏目漱石が行った『方丈記』の英訳の過程において本作品の読みがいかに豊かになり、さらにこの作品が英米でどのように流通したのか、その経緯と要因を検証する。

本稿はまず『方丈記』の従来の解釈に触れた上で、漱石の『方丈記』論を紹介し、彼の解釈が英米の読者にいかに受容されたのかを述べる。この試みの中で、1896年に米国で刊行された著書*Sunrise Stories- A glance at Japanese Literature*に収録された『方丈記』の描写を分析し、作者の『方丈記』理解を考察する。次に、1905年にイギリスで出版された南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳に注目し、その題目がいかに漱石の『方丈記』理解から影響を受けたのかを検討する。最後に、1912年にイギリスで刊行されたF. Hadland Davis著*Myths and Legends of Japan*に見られる鴨長明の評価の中に、いかに漱石の『方丈記』解釈が現れているのかを考察する。このような研究を通じて、古典的名作である『方丈記』の海外における受容のありようを明らかにしつつ、19世紀末から20世紀初頭の西洋における日本古典文学の流通について考えたい。

1.『方丈記』の従来の解釈と漱石の『方丈記』論

鴨長明著『方丈記』(1212) は、中世期に書かれた古典文学の代表作の一つとして現在に至るまで受容されてきた。この作品は、その成立以後において多くの作品の中で言及され、江戸期になるとその注釈書が作成されるなど学問の対象にもなった[4]。明治期には学校の教科書の一部になり、正典として定着するにつれて、漱石以外にも芥川龍之介 (1891－1927)、佐藤春夫 (1892－1964)、堀田善衛 (1918－1998)、漫画家の水木しげる (1922－2015) や建築家の隈研吾 (1954－) など多分野の知識人から注目されてきた。

『方丈記』はなぜ長い間読者から支持を集めたのか。その理由を特定するのは難しい。しかし、本作品の分量の短さおよび明瞭な構造と内容はその一つの大きな理由であったと推測される。一方で、その長い受容史を辿ってみると、読者はこの作品の三つのテーマに着目したことがわかる。まず第一に、仏教的な無常思想である。これは『十訓抄』

3　デイヴィッド. ダムロッシュ『世界文学とは何か？』(秋草俊一郎他訳、国書刊行会、2011、17-18頁)。
4　簗瀬一雄『方丈記諸注集成』(豊島書房、1969)。

（1252）や『平家物語』（13世紀頃）など他の中世期の作品を始めとして、現在までしばしば取り上げられるテーマである。次に、隠者文学としての『方丈記』の性格である。鴨長明は本作品で自身の隠遁生活を詳細に描いており、その影響は『閑居友』（1222）や『ひとりごと』（1467）を始め、漱石の『草枕』（1906）など近代作品にも確認できる[5]。最後に、『方丈記』の半分以上の分量を占める災害のモチーフである。文学作品の中では『平家物語』『かなめいし』（1662）や『犬方丈記』（1682）などが『方丈記』の災害描写から影響を受けており、近代以後では芥川龍之介、内田百閒、堀田善衛などの作品にもその直接的な影響が確認できる[6]。同じく2011年の東日本大震災の後、エコクリティシズムの視点からも『方丈記』の再検討が試みられている[7]。むろん、上記のテーマはそれぞれ重なる部分も多いが、『方丈記』の受容史を見る限り、特にこれらのテーマが長きにわたって読者の関心を集めてきたことに相違はない。しかし、後述するように、漱石はこのようなテーマに関心はなく、イギリスのロマン主義的な自然文学として『方丈記』を解釈したのである。

漱石は東京帝国大学に在籍していた時、自身の英文学の先生だったディクソン（James Main Dixon, 1856－1933）に依頼されて『方丈記』を部分的に英訳した。漱石は、その英訳とともに短いエッセイも書いたが、このエッセイは彼の『方丈記』論を理解するために貴重な資料である[8]。一方でディクソンは漱石の英訳とエッセイをもとにして新たな英訳を完成し、さらに長明と英詩人ワーズワース（William Wordsworth, 1770－1850）を比較した論文も執筆して日本アジア協会で発表した[9]。この英訳と論文は、同学会の会報に掲載され、これを契機として『方丈記』が始めて日本の国境を越えて海外の読者の手に届くようになったのである[10]。

5　荒木浩「『方丈記』と『徒然草』―〈わたし〉と〈心〉の中世散文史―」（『中世の随筆 ―成立・展開と文体』、竹林舎、2014年、261-273頁）。

6　芥川龍之介の『本所両国』（1927）や堀田善衛著『方丈記私記』（1971）などが代表的な例である。また、エコクリティシズムの視点から『方丈記』を論じた研究として次の論考がある。豊田沖人 'Kamo no Chomei's Hojoki as Nature Writing.'（武蔵工業大学環境情報学部紀要 ―第５号、2004、pp. 114-120）。

7　Daniela Kato and Allen Bruce. "Toward an Ecocritical Approach to Translation: A Conceptual Framework." The 2014-2015 Report on the State of the Discipline of Comparative Literature, 2014.

8　夏目漱石「A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It」（『漱石全集　第26巻』、岩波書店、1996年、373-351頁）。

9　J. M. Dixon. "Chomei and Wordsworth-A Literary Parallel," "A Description of My Hut." *Transactions of the Asiatic Society of Japan 20*（1892－1893）, pp. 193-215.

10　拙稿「『方丈記』の受容：夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐって」（総研大文化科学研究（13）、2017、104-107頁）を参考。

ここで、漱石の『方丈記』の捉え方についてその特徴を確認しておこう。彼はエッセイの中で『方丈記』に触れる前に、まず作者と作品といった文学的な概念から論じ始めている。彼は作者と作品を天才の作品、才能の作品、それらの中間に位置する第３の作品という３つの類型に分類している。天才の作品は最も優れたものであり、才能の作品は一時的に読者の注目を集めるが、すぐに忘れられるという。そして、漱石によれば『方丈記』は天才の作品と才能の作品の中間に位置する第３の種類に属する作品であった。つまり、この作品は天才の作品でなく、すぐ忘れられてしまう才能の作品でもないとされているのだが、漱石のこのような分類は注目に値する点がある。なぜなら、漱石が長明をワーズワースと比較すべく、意図的に『方丈記』を第３種に分類したと思われるからである。漱石によると、ワーズワースは天才であり、長明の作品はワーズワースのそれには及ばないものである。特に、彼はワーズワースの自然観を取り上げて、長明が『方丈記』に示した自然観はワーズワースのそれより大きく衰えていると主張し、長明を批判の対象にした。その一方で、漱石は『方丈記』を以下のように評価している。

> それにもかかわらず、この作品は２つの理由で薦められる。第１に、真摯な、それでいて挑戦的な口調で、作者が正しい生き方を述べ、幸福の幻影を追い求めることの愚かさを表していること。第２に、かりそめにせよ、喜びのもたらすことのできるものとしての自然に対する素朴な賛美と、先人たちに見られる高貴なるものに対するしかるべき尊敬[11]。（With all that the work recommends itself to some of us for two reasons: first for the grave but not defiant tone with which the author explains the proper way of living, and represents the folly of pursuing shadows of happiness, secondly for his naive admiration of nature as something capable of giving him temporary pleasure, and his due respect for what was noble in his predecessors.）

上記の引用からわかるように、漱石は『方丈記』を主に２つの点で評価している。まずは、長明が日野山で過ごした質素な隠遁生活である。次に、自然に対する長明の素朴な賛美である。漱石が指摘した隠遁者としての長明像はこれまでの『方丈記』の受容史でも度々注目された点であり、特に驚くことはない。問題は漱石が取り上げた長明の自然観というテーマである。なぜなら、漱石が指摘するまでに長明の自然観に着目した読者はいなかったからである。なぜ漱石が長明の自然観に注目したのかは興味深い問題で

11　訳文は『漱石全集』から引用。『漱石全集 第26巻』（岩波書店、1996年、371（126）頁）。

あるが、本論の筋から脱線するためここで詳しく論じることはしない[12]。しかし簡潔に言えば、翻訳を依頼したディクソンの存在が漱石の『方丈記』論の方向性を決定づけたと思われる。すなわち、翻訳研究者のギデオン・トゥーリー（Gideon Toury）が翻訳規範（translation norms）という概念で示した通り、翻訳依頼者ディクソンの文化的・言語的な規範に対応するため漱石は英文学の視点から『方丈記』の内容を解釈したのである[13]。明治期に優れた文明とされていたスコットランドから日本の高等教育の近代化のために招かれたお雇い外国人のディクソンが日本の異文化を容易に理解できるよう、漱石は12世紀の日本の隠遁者を19世紀の英国の詩人ワーズワースと比較して論じた。このことは、漱石がディクソンの専門とする英文学の作品シェイクスピア著*The Tempest*やゴールドスミス著*The Hermit*など名作から引用しながら『方丈記』を解釈したことからも明白である。漱石は長明の自然観がワーズワースのそれより劣化していることを示すために、それまで仏教文学、あるいは災害文学・隠者文学の作品として読まれてきた『方丈記』を西洋のロマン主義的な作品として取り上げたのである。ここで注意すべき点は、漱石が置かれた状況がいかに彼の『方丈記』解釈を形成し、それによって本作品の読み方が豊かになったということである。本稿の冒頭では、作品が翻訳などを通じて世界文学の仲間入りをする時作品の読みが豊かになると述べたが、『方丈記』の場合もその海外伝播の過程において新たな解釈が生み出されたのである。

先述の通り、ディクソンは漱石の英訳とエッセイをほぼ模倣した形で新たな『方丈記』英訳を完成させ、同時に長明とワーズワースの比較検討を行った論文を執筆して、日本アジア協会の会報に掲載した。この会報は世界各地に流通していたため、『方丈記』も海外に伝播し、世界文学として読まれ始めたのである。以下では、漱石の『方丈記』論がアメリカとイギリスで刊行された著書にいかに影響を与えたのかを考察し、本作品の流通過程を明らかにする。

2．*Sunrise Stories* に収録された鴨長明像

明治期以降、欧米において日本への関心が高まる中、1896年に日本文学への理解を広めることを目的としたアメリカ人のロジャー・リオーダン（生没年不詳）と日本人の高

12　漱石の『方丈記』理解の詳細に関しては、拙稿“Natsume Sōseki’s English Translation of Hōjōki: Characteristics and Strategies.”*Japan Review*, Vol. 32, 2019, pp. 69-88を参考。

13　Toury, Gideon. “The Nature and Role of Norms in Translation.” In idem, *Descriptive Translation Studies and Beyond,* Amsterdam-Philadelphia: John Benjamins, 1995.

柳陶造（1851－？）による共著*Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan*（以下便宜上『サンライズ・ストーリーズ』と表記する）がアメリカ・ニューヨークで刊行された[14]。作者らの目的は、西洋の読者に日本文学を紹介し、それを通して作者ら自身が従事した日本美術への興味を抱かせることにあった。内容的には1898年に出されたアストン著『日本文学史』とは比較にならないとしても、英文で日本文学の主な作品や人物を一冊にまとめた最初の書籍として重要な意義をもっている[15]。しかし、管見の限り日本文学の観点から本書を論じた研究は見当たらない。また、海外で本書を対象にした研究がいくつかみられるが、いずれも翻訳学の視点からのものであり、欧米における日本文学の受容の観点から論じたものはない[16]。その全体の考察は別の機会に譲るとして、本節ではこの本に収録された『方丈記』の描写に焦点を絞り、作者の『方丈記』受容の内実を検討する。

281頁からなる『サンライズ・ストーリーズ』の約12頁にわたって記載されているKamo no Chōmei's "Story of my Hut" という章に『方丈記』の描写が収録されている[17]。高柳らはなぜ『方丈記』をこの本の一部に含めたのか、その理由は定かではない。おそらく、既に西洋人がこの作品に関心を持っていたことを知っていたため、作者はこの作品を自分の本の一部にすることで読者の注目を集めようとしたかもしれない。あるいは、『方丈記』の部分的な英訳が材料としてすぐに利用可能であったからこの作品を本に含めたということも考えられる。いずれにしても、作者ら自身もこの作品に一定の関心を持っていたと思われる。作者は、中世日本の戦乱期を生きた長明が、失望のあまり隠遁したと説明したあと、次のように述べている。

> 家が人間の外衣のようなものであるとソローは指摘したが、長明にとって家は彼自身の一部であった。長明は住家と住人の運命の類似性について詳細に描いて

14　Riodan, Roger and Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan.* New York, C. Scribner's sons., 1896, 281 p.　また、本書の内容とロジャー・リオーダンの略歴などを考慮して、この書は主に高柳陶造が書いたと思われるため、本稿で高柳を主な著者とした。

15　本書の前にフランス語で書かれたレオン・ド・ロニー著*Cours pratique de langue japonaise*や日本アジア協会の会報に出された日本文学作品の英訳以外に欧文で日本文学の全体をまとめた著書は確認できない。

16　本書に関して次のような研究がある。Henitiuk, Valerie. "Squeezing the Jellyfish: Early Western Attempts to Characterize Translation from the Japanese." In St-André, James, ed. *Thinking through Translation with Metaphors.* Manchester: St Jerome, 2010, pp. 144－160. Sato Emiko. "Metaphors and Translation Prisms." In *Theory and Practice in Language Studies,* Vol. 5, No. 11, November 2015, pp. 2183-2193.

17　Riodan, Roger and Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan.* New York, C. Scribner's sons., 1896, pp. 151-162.

いる[18]。（Thoreau speaks somewhere of the house as the man's outer garment; but to Chomei it was a second self. He dwells on the similarity of the destinies of domicile and inmate.）

ここからわかるように、高柳らは長明とアメリカの自然崇拝者ソロー（Henry David Thoreau, 1817－1862）との比較から『方丈記』を論じ始めている。人間にとって家は外衣のようなものであるとソローが指摘したのに対し、長明にとって家はより本質的な存在であったと指摘し、彼自身の一部であったと高柳らは主張している。そして、日野山における長明の草庵とソローがウォールデン池のほとりで建てた小屋との類似性について次のように記している。

長明の草庵をソローのウォールデン池の辺にあった小屋と比較するのも興味深い。コンコードの隠者は家具について「ベッド、テーブル、机、椅子三つ、直径三インチの鏡、火箸と薪台、ヤカン、鍋、フライパン、柄杓、洗い物用の鉢、ナイフとフォークふた組、皿三枚、カップ、スプーン、油差し、糖蜜差し、漆塗りのランプ」だけを所有していた。これらの全ては、自分自身のためであり、絶対に必要なものだけで生活するのが彼の実験の目的であった。（中略）長明にとって自然はニューイングランド地方の哲学者（筆者注：ソロー）よりさらに大事な存在であったろう[19]。（It is interesting to compare it with Thoreau's. The Concord hermit encumbered himself with "a bed, a table, a desk, three chairs, a looking-glass three inches in diameter, a pair of tongs, and a pair of andirons, a kettle, a skillet, and a frying-pan, a dipper, a washbowl, two knives and forks (sic), three plates, one cup, one spoon, a jug for oil, a jug for molasses, and a japanned lamp."（…）Nature, too, seems to have had more to say to Chomei than to the New England philosopher.）

高柳らは長明をソローと比較することで、前者がいかに自然崇拝者であったのかを示し、長明の自然観が米国ニューイングランド地方の哲学者であるソローの自然観より深い意味を持っていたと主張した。高柳らは、この後も『方丈記』の描写の中で長明がいかに西洋の有名な自然崇拝者であるルソーやワーズワース、ソローより優れていたのかを示している。そこでは、ルソーに道徳的な問題があり、ワーズワースの自然観は狭い

18　和訳は筆者による。Riodan, Roger and Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p. 153.

19　和訳は筆者による。同上、158頁。

ものであったと指摘されている。同じく、ソローも自然を観察するあまり、その美しさを十分に鑑賞できなかったと評価している。一方で長明の自然観はより本質的なものであり、彼は芸術的かつ人間性に富んだ性格を持っていたと示している。高柳らはいかなる経緯で『方丈記』と鴨長明を自然観から捉えることに至ったのであろうか。

『サンライズ・ストーリーズ』の執筆に当たり、作者らは欧米で既に翻訳されていた日本文学作品を参照したと明記しているが、『方丈記』の出典については記していない。しかし、その内容から高柳らは日本アジア協会の会報に掲載されたディクソンの英訳と論文を題材にしたことが見て取れる。両者の文章を比較すると、その内容だけでなく、言葉そのものも類似する場合が多いことが確認できる。以下に長明の草庵を描写したディクソンの英訳と高柳らの著書からの該当部分を比較してみる。

> ディクソン訳：On the southern side I have hung a temporary curtain, with a bamboo mat under it; on the western wall a shelf has become the sacred receptacle for the image of Buddha, where his brow may catch the brightness of the western sun. On each of the two door leaves I have hung a picture - one of Hugen, the other of Hudō. Above the lintel of the northern door I have fastened a shelf, on which are placed several black leather boxes containing literary papers, Japanese songs, ōjio-yoshū and the like. Close by, leaning against the wall, are a koto and a biwa, to which I have given the names of Origoto and Tsugi-biwa respectively[20].
>
> 『サンライズ・ストーリーズ』: A shelf attached to the inner wall held an image of Buddha, placed where the morning sun might strike upon the forehead. Pictures of the Fugen and Fudo hung upon the leaves of the door, and certain black boxes held his Buddhist books of devotion and some volumes of old Japanese poetry. Close by leaned against the wall a biwa and a koto[21].

上記引用の通り、高柳らの書いた内容は勿論、その文章もディクソンの文章とほぼ同じであることがわかる。例えば、ディクソン訳にあるClose by, leaning against the wall, are a koto and a biwaの部分は、後者ではClose by leaned against the wall a biwa and a kotoとなっており、言葉も類似している。このような類似性は高柳らの著

---

20 Dixon, J. M.. “A Description of my Hut” In *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XX,” 1893, p. 209.

21 Riodan, Roger and Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner’s sons., 1896, p. 153.

書に収録された『方丈記』の全体的な内容について言えるのである。

高柳らがディクソンの英訳を取り入れた最も明確な証拠は、長明を西洋の自然崇拝者であるルソー、ワーズワース、そして、ソローと比較したことにある[22]。高柳らは、長明が以前にフランスの哲学者ルソーやイギリスの詩人ワーズワース、アメリカの自然崇拝者ソローと比較されたことがあると述べているが、これはディクソンの論文で言及されたものである。ディクソンが長明とワーズワースに関する論文を発表したとき、同時にルソーについても言及している[23]。ただし、ディクソンはソローについては言及していないが、当時のアメリカで自然崇拝者としてソローの知名度は非常に高かったため、ディクソンの提示した長明像を参照した高柳らは、そこから自然にソローを連想し得たと思われる。つまり、高柳らはディクソンの論文を参照したからこそ長明をソローに譬えることができたのである。長明をソローと比較することで、作者らは西洋の読者の注目を集めると同時に、日本の12世紀の隠遁者を紹介しようとしたのだ。

一方で、ディクソンと高柳らによる長明の捉え方には一つ大きな相違点もあった。ディクソンによれば、長明の自然観はイギリスの詩人ワーズワースより劣っていたが、先ほど触れたように、高柳は長明の自然観が西洋の文人や思想家よりもっと本質的なものであったと主張している。ディクソンは、ヨーロッパ中心主義的な視点から『方丈記』を捉えたのに対し、高柳は長明を西洋の人物より高い地位に位置付けているのだ。興味深いのは、高柳がディクソンの英訳と論文をもとにしたにも関わらず、ディクソンと異なった長明像を西洋の読者に提示しようとしたことである。その理由は定かではないが、『サンライズ・ストーリーズ』の出版時期を考えれば、近代化の道を歩み始めていた日本が日清戦争で勝利を収め、西洋列強を追い越そうとしていた時期とも重なる。そのような国際社会での新たなポジションを模索していた日本国民の一人として、高柳が長明を西洋の文人よりも高く評価したことは驚くことでもないだろう。なぜなら、明治後半以後において国内でも同じような動きが確認されるからである[24]。いずれにしても、『方丈記』の海外流通においては、漱石により提唱された自然文学作品としての『方丈記』のイメージが、ディクソンの翻訳や論文を通じて高柳らによって継承され、後述するようにさらに後代にも受け継がれていったのである。

22　原文は次の通りである。He has been compared with Rousseau, Wordsworth, and Thoreau. Riodan, Riodan, Roger and Tozo, Takayanagi. *Sunrise Stories – a glance at the Literature of Japan*. New York, C. Scribner's sons., 1896, p. 162.

23 'Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892),' *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol.20 (1892), p. viii.

24　大津雄一『『平家物語』の再誕　創られた国民叙事詩』(NHKブックス、2013年)。

3．熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳の題目をめぐって

漱石の『方丈記』英訳から11年後の1903年に民族学者・博物学者の南方熊楠（1867－1941）が漱石と同じくあるイギリス人から頼まれて『方丈記』を英訳した。その依頼者とは、熊楠がイギリス滞在の頃から知り合いになっていた日本学者のディキンズ（Frederick Victor Dickins, 1838－1915）である。ディキンズは、熊楠の英訳を大幅に修正した後、1905年に両者の共訳として王立アジア協会の機関誌（Journal of the Royal Asiatic Society）に*Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century*という題目でそれを発表した[25]。これが本作品の最初の全訳であるが、これに関しては既に多くの研究が存在する。本節では先行研究で注目されてこなかったその「題目」に焦点を当て、それがいかに漱石の『方丈記』論の影響のもとで形成されたのかを明らかにすると同時に、この作品の海外流通を追求する[26]。

熊楠の『方丈記』英訳は、彼のいわゆる那智隠栖期の代表的な成果の一つである。1903年４月７日に熊楠が受け取ったディキンズからの手紙には次のようなことが書かれている。

> （筆者注：私は）竹取と万葉集の長歌のすべてをローマ字表記し、英訳と注釈をつけて出版するつもりです。目下のところ、半分まで終えました。高砂の能、そしてあの素晴らしい小品『方丈記』も入れ、俊蔭（『宇津保物語』）も入れたいところですが、時間が足りないでしょう。俊蔭を英訳して送っていただくわけにはいきませんか。ここで編集し、あなたのものとして本に入れましょう[27]。（I shall publish the texts in Roman of the Taketori and of all the 長歌of 万葉集with translations and commentaries. I have about half finished. I shall add the Nō of Takasago and perhaps that very pretty old story 方丈記. I should like to add

---

25　Minakata Kumagusu and F. Victor Dickins. “Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century.” *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1905, pp. 237-264.

26　この共訳に関しては次の研究が詳しい。小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」（熊楠研究(4)，2002-03、8-21頁）。小泉博一「翻訳・ディキンズ・『方丈記』（特集：南方熊楠 ―ナチュラルヒストリーの文体）」（国文学 解釈と教材の研究 50(8)，2005-08、40-46頁）。松居竜五「第20回『熊楠をもっと知ろう!!』シリーズ F・V・ディキンズ、熊楠間の交流と英訳『方丈記』の執筆」（熊楠works(41)，2013-04-01、32-35頁）。松居竜五「南方熊楠と『方丈記』：ディキンズとの共訳をめぐって」（(特集 方丈記800年）文学 13(2)，2012-03、77-93頁）。千本英史「鴨長明と『方丈記』」（熊楠Works(41)，2013、24-28頁）。千本英史「自筆資料に見る南方熊楠11「方丈記」英訳草稿」（熊楠Works(40)1，2012）。

27　F. V. ディキンズ［著］、岩上はる子・ピーター・コーニッキ 編『F. V. ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』（エディション・シナプス、2011、282頁）。

the Toshikage（Utsubo m［ono］g［atari］but I think I shall not have time. I wish you would translate the Toshikage and send it me. I would revise it and add it as yours. In my 竹取 I shall not fail to mention your help- though I have since read quite through Daisho's 首 volume and shall not go beyond it much.）

上記の内容が書かれた手紙を受け取った熊楠は、その２ヶ月後には既に英訳に着手しているが、手紙の内容を見る限りでは、ディキンズは『方丈記』の英訳を依頼していないことがわかる[28]。彼が熊楠に頼んだのは「俊蔭（Toshikage）」、すなわち『宇津保物語』である。ただし、彼は『宇津保物語』以外に複数の作品を訳したいという意向を示しており、その内の一つが『方丈記』であった。しかしながら、熊楠はディキンズが依頼した『宇津保物語』ではなく、示された複数の作品のうち『方丈記』だけを選び、その英訳を行ったのである。このことから当時の熊楠にとってこの作品が重要な存在であったことがわかる。また、熊楠が残した当時の資料をみると、彼は『方丈記』に強い関心を寄せていたことも看取できる[29]。

熊楠の英訳はディキンズにより修正され、*Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century*という題目で両者の共訳として発表された。この英訳は、1907年にディキンズの単独英訳としてゴワンズ社（Gowans & Gray, Ltd）から*Ho-jo-ki: Notes from a Ten Feet Square Hut* という新しい題名で出版された。さらに、1933年に日本で版権を取得したSan Kaku Shaからディキンズ単独の英訳として*THE HO-JO-KI*（*Notes from a Ten Feet Square Hut*）という題目で出版された。後の２つの英訳はディキンズ単独のものであるため、その題目もディキンズ自身か、あるいは出版社の編集者と共同で決められたと考えるのが妥当であろう。問題は1905年版の題目である。先行研究ではこの題目について詳細に追求されてこなかったが、これは注目に値する課題である。なぜなら、この題目からそれを決めた人物の『方丈記』理解が読み取れるのみならず、なぜこの題目で長明がソローに譬えられたのかも明確になるからである。

小泉博一は、1905年版の題目に関して次のように指摘している。

28　1903年６月13日付の熊楠の日記に「午後方丈記翻訳にかかる」と記載されている。『南方熊楠日記２』（八坂書房、1987年、351頁）を参照。

29　熊楠が英訳を終えた時期と重なる1903年６月30日に友人土宜法龍（1854－1923）に宛てた手紙に次のような一行がある。「（筆者注：ディキンズは）来年一世一代の日本の著書のしまいとして、かの『竹取』を再板し、『にちれん大土伝』「高砂」の謡曲、『万葉集』の中の長歌、それに小生の『方丈記』の訳（これは小生只今の身に取り実際ゆえ、はなはだよし）、事により『義経記』か『曽我物語』も小生訳し、合本にして出板するなり。」詳細は、南方熊楠(著)，土宜法竜（著），飯倉照平(編集)，『南方熊楠・土宜法竜往復書簡』（八坂書房 1990/11、278頁）を参照。

熊楠がソローの名前を『方丈記』に採用したのは、アメリカに滞在中か、あるいは、英国博物館書籍室で、おそらく『ウォールデン』（*Walden, or Life in the Woods*, 1854）をはじめ、その著書を読んでいたと思われるソローの数奇な生涯が、鴨長明のそれと重なり合うという印象からであろう。また、熊楠自身、1903年６月30日の土宜法龍に宛てた手紙のなかで、「これは小生只今の身に取り実際ゆえはなはだよし」と書いているところからみると、自身の生活そのものを長明のそれと同様に、ヘンリー・ディヴィッド・ソロー（Henry David Thoreau 1817－1862）にもなぞらえ、この訳業が熊楠自身の体験に裏付けられたものであることを明らかにしていることは注目に値する[30]。

すなわち、小泉は熊楠が那智で過ごした生活が長明やソローが山中で送った閑寂な生活と似ていたとして英訳の題目にソローの名前を付け加えたと指摘している。しかし、実際にはこの題目はディキンズによるものであったと思われる。このことは現存する当時の文献から確認できる。

まず、熊楠が英訳を行ったとき、それ以前に行われていた漱石やディクソンの英訳についてはその存在を知らなかったため、前例に倣って長明をソローと譬えたとは考えられない[31]。一方で、ディキンズはこの共訳を完成させるに当たり、先行研究として長明とワーズワースの比較検討が行われたディクソンの論文を読んだ可能性はあり、自然崇拝者としての長明の捉え方については知っていたと思われる[32]。ディキンズがこの題目を決め、それにソローの名前を付け加えた最も根本的な証拠は、前節で取り上げた『サンライズ・ストーリーズ』のイギリスの雑誌に掲載された書評にある。この著書は1896年３月にアメリカで出版された後、同年10月にイギリス・ロンドンで刊行され、その数ヶ月後に当時のイギリス文壇における有力な文芸雑誌であった*The Athenaeum*に作者不明の書評が発表されている[33]。実は、この書評はディキンズが書いたものであった。

ディキンズとこの雑誌の関係は古く、彼はこの雑誌に日本関係の書物の書評や記事を

30　小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」（熊楠Works(4)、2002-03、14-20頁）。

31　同上、13-15頁。

32　この共訳に次の記述がある。Another version－my mind very imperfect－has been published,［which］I find, in the Trans. Of the As. Soc. Of Japan of 1892. これは間違いなく日本アジア協会の会報に掲載されたディクソンの『方丈記』英訳のことである。Minakata Kumagusu and F. Victor Dickins. “Hōjōki – A Japanese Thoreau of the Twelfth Century.” *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, p. 256.

33　*The Athenaeum- Journal of the Literature, Science, The Fine Arts, Music, and the Drama*. No. 3610, Jan. 2. 1897. London, January-June, 1897, p. 13.

定期的に寄せていたことが知られている[34]。また、『サンライズ・ストーリーズ』の書評内容を見ると、この短い文章の中に、日本に関する偉大な先行研究としてディキンズ著の本２冊が挙げられている。そこで、現在この雑誌を所蔵しているロンドン大学シティ校に確認したところ、書評者がディキンズであったことが判明した[35]。ディキンズの書評と『方丈記』共訳には７年間の隔たりがあるが、上記の点を考え合わせると、この共訳の題目はディキンズが決めた可能性が極めて高い。すなわち、彼はディクソンの英訳と論文を参照し、高柳らの本に提示された長明とソローの比較から着想を得て、題目の中で長明を12世紀の日本のソローとして紹介したのである。ディキンズは対象読者のことを考慮してソローの名前を付け加えたと考えられる。ソローはアメリカのみならず、イギリスを含む西洋で自然崇拝者としての知名度が非常に高かった。そのため、ディキンズは、西洋では知られていない日本古代の文人をソローと比較する形で紹介したのである。実は、ソローの名前は題目以外に、この英訳のどこにも確認できない。このことからもわかるように、ディキンズが西洋の読者から注目されやすい題目にしたに違いない。それと同時に、ディキンズによる長明の捉え方は、先に触れたディクソンと同じく、西洋中心主義的なものであった。これは、ダムロッシュの提唱した世界文学の一つの特徴に当たる。つまり、『方丈記』の海外の読者であったディキンズは、この作品に関心を寄せながら、西洋の優位性を主張することで、この外国作品と一定の距離を保ち、対峙的な姿勢を示したのである。

上記のように、熊楠・ディキンズの共訳の題目は、先行研究で指摘されたように熊楠ではなく、ディキンズが決めたものであった。ディキンズは、ディクソンの論文で提示された自然崇拝者としての長明像および高柳らの本に提示された長明とソローの比較検討から着想を得て、共訳の題目にソローの名前を採用した。このように、漱石の『方丈記』論は熊楠・ディキンズの共訳にまで影響を与えていたのである。以下にみるように、このような長明像はさらに後代にも受容されていったのだ。

４．F. H. デイヴィスの『方丈記』受容について

上述した通り、漱石の『方丈記』論はディクソンを経て高柳らに受け継がれ、さらに

34　F. V. ディキンズ［著］、岩上はる子・ピーター・コーニッキ 編『F. V. ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』（エディション・シナプス、2011、vi頁）。

35　出版社が保管した原本の書評の部分に手書きでディキンズの名前が書かれている。

熊楠・ディキンズの共訳にまで継承された。熊楠・ディキンズの共訳は、数年後にディキンズの単独訳として文庫本の形でゴワンズ社から刊行され、イギリスでは比較的広く読まれるようになった。その読者の一人が本節で取り上げるイギリス人のフレデリック・ハドランド・デイヴィス（Frederick Hadland Davis、生没年不詳）である。後述のようにデイヴィスもこれまで通りに漱石の提唱した『方丈記』論を受け入れたのである。

ヨーロッパにおけるジャポニズム時代に生まれたと思われるデイヴィスは、東洋に強い関心を持ち、1907年に*The Persian mystics*というイスラム教やスーフィズムなどに関する本を著した。その３年後に日本の神話や昔話を収録した*The land of the yellow spring, and other Japanese stories*を著したが、現在では彼は*Myths and Legends of Japan*（1912）（以下、便宜上「本著書」と表記）の作者として知られている[36]。32枚の写真入りで432頁に及ぶこの本は様々な言語に翻訳され、現在でも出版し続けられているほど人気を集めた一冊である。デイヴィスは、西洋で既に出版された日本関係の書物などから昔話や神話を集めてこの本を書いたが、その中に鴨長明に関する記述もあり、そこから作者の『方丈記』理解が見て取れる[37]。

本著書に収録された『方丈記』への言及は、長明についての描写に伴って行われているため、デイヴィスは『方丈記』よりも長明という人物に注目したことがわかる。この本の２箇所に長明についての説明がある。最初に「花と庭園」（Flowers and Gardens）という章の一部として「偉大な自然崇拝者」（A Great Nature Lover）という副題に長明に関する描写がある。ここでは、『方丈記』を簡単に紹介した後、60歳になった長明がいかに日野山で質素な草庵を作り、美しい自然を楽しみながら閑寂な生活を送ったのかが述べられている。デイヴィスによれば、長明は山谷や花木の大自然を頼りにして人生を送った偉大な自然崇拝者の一人であった。彼は西洋の読者に東洋のこの自然主義者のことを紹介するため自著に長明の描写を含めたと記している[38]。また、「自然を歌っ

36　Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan.* George G. Harrap & Company, London, 1912, 432 p.

37　デイヴィスの『方丈記』への関心は少なくともこの本が書かれた２年前にまで遡る。1910年に彼がイギリスのブリストル市に講演会を行った時『方丈記』を朗読したことが現地の新聞で取り上げられている。“The “Charles Lamb” Fellowship of book lovers, Clifton.” In *The Western Daily Press. Bristol, Saturday*, Oct 23, 1909, p. 8.

38　デイヴィスは次のように記述している。But Chōmei was a happy soul, and we mention him here to show that the mainstay of his life were not the things of the world, but the workings of the Nature on the hills and in the valleys, in the flowers and in the trees, in the running water and in the rising moon. Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, p. 160.

た詩」（Nature Poems）という別の章には鴨長明について次のような記述がある。

> 私は、たびたびかの12世紀の日本の隠遁者のことを思い出す。彼は都から遠く離れた山小屋に住んでいた。彼はそこで本を読み、琵琶を弾き、散歩へ行くついでに花や木の実を採集して、釈迦に捧げていた。長明はまことの自然崇拝者の一人であった。なぜなら、彼は自然のあらゆる意向を理解していたからである。（中略）これほどまでに自然の偉大な愛好者であった長明は、きっと花の色や香など大自然の諸要素を死後の世界にまでもっていったに違いない[39]。（I often think about that twelfth-century Japanese recluse Chōmei. He lived in a little mountain hut far away from City Royal, and there he read and played upon the biwa, went for walks in the vicinity, picking flowers and fruit and branches of maple-leaves, which he set before the Lord Buddha as thank offerings. Chōmei was a true lover of Nature, for he understood all her many moods. […] He loved Nature so well that he would fain have taken all the colour and perfume of her flowers through death into the life beyond.）

一見ヴィクトリア朝の自然崇拝者の詩人を描写したかのように思わせる上記引用文では、デイヴィスが、都から離れた山中の粗末な草庵に住んだ長明がいかに偉大な自然愛好家であったのかを主張している。デイヴィスのこのような主張は、上記で取り上げた各者による長明の解釈と類似しているが、その背景にはいくつかの理由が考えられる。

まずは、直接的な理由としてデイヴィスが長明ないし『方丈記』について参考にした先行研究が挙げられる。彼の著書は欧文で書かれた二次資料をもとにしたものであり、『方丈記』に関してもディキンズの英訳を参照したと明記されている。また、この本に収録された『方丈記』の引用文は、熊楠・ディキンズの共訳と一致しているため、デイヴィスはこの共訳の題目に注目し、長明とソローの比較検討から着想を得て、長明を自然崇拝者として解釈したと推測できる。むろん、彼がこの共訳の他にディクソンの『方丈記』英訳や鴨長明に関する論文、さらに高柳らの著書も参照したことは否定できない。

次に挙げられるのはデイヴィスが文学活動を行った当時のイギリスにおける日本趣味の風潮である。すなわち、上に示したデイヴィスの著書そのものがイギリスにおける東洋趣味の産物であり、彼自身も日本に対して異国趣味的なイメージを持っていたことが文献から確認できる。例えば、野口米次郎（1875－1947）の1913年のイギリス訪問につ

39　和訳は筆者による。Davis, F. Hadland. *Myths and Legends of Japan*. George G. Harrap & Company, London, 1912, p. 385.

いて、その翌年デイヴィスが書いた記事では、野口の写実的な詩に見られる自然とスピリチュアルに富んだ内容を高く評価しながら、野口の詩には古代日本の魅力があり、日本独特の美もあって、日本を越えて世界中の読者を満足させる力があると記している[40]。デイヴィスのこのような指摘は、先行研究などで指摘されたように、当時のイギリスで活躍したエズラ・パウンド（1885－1972）やW. B. イェイツ（1865－1939）など東洋主義者が描いた日本像と類似している[41]。さらに、デイヴィスは日本をエキゾチックな国として取り上げたラフカディオ・ハーン（1850－1904）の強力な称賛者の一人でもあり、実際に両者の日本像は類似していた[42]。

理由は何であれ、ここで重要なのは漱石が初めて提唱した自然崇拝者としての長明の解釈が20年の歳月を経て日本からアメリカへ、そしてイギリスの読者であったデイヴィスにまで受容されたことそのものである。なぜなら、これは19世紀末・20世紀初頭における日本文学の世界的な受容のあり方を示す重要な一例であるからである。

終わりに

国内では『方丈記』は長いあいだ仏教文学、あるいは隠者文学・災害文学の作品として読まれてきた。しかし、この作品の最初の外国語訳に挑んだ漱石は、自身が置かれた状況により、従来の解釈と異なった解釈を提唱し、その解釈はこの作品の海外流通によって欧米の読者にも継承された。漱石は、英訳を依頼した自身の先生であるディクソンの期待に応えようとして、ディクソンが専門とする英文学におけるロマン主義的な自然文学の観点から『方丈記』を解釈した。そのため、漱石の『方丈記』論はディクソンという人物の外的な影響下で形成されたと言える。それと同時に、この翻訳を通して『方丈記』の新たな解釈も生まれた。これは、冒頭で述べたダムロシュの指摘した世界文学の一つの特徴である。その一方で、漱石をあくまでも情報提供者として利用したディクソンは、漱石の『方丈記』論を受け入れて新たな英訳を完成させ、鴨長明とワーズワースを比較検討した論文も執筆して日本アジア協会の会報に発表した。これを契機として、『方丈記』ははじめて世界の読者の目に触れることになった。これは、ダムロシュ

40　Davis, F. Hadland. “The Return of Yone Noguchi.” In *T. P.’s Weekly*, January 2, 1914, p. 7.

41　Hakutani, Yoshinobu. “Ezra Pound, Yone Noguchi, and Imagism.” *Modern Philology*, Vol. 90, No. 1, The University of Chicago Press, Aug., 1992, pp. 46-69.

42　Davis, F. Hadland. “Lafcadio Hearn.” *The Japan Magazine*, Vol. 11, No. 8. The Japan Magazine Company, January, 1921, p. 422.

の指摘した世界文学のもう一つの特徴である。すなわち、ディクソンの英訳と論文を通して、初めて『方丈記』は日本の文化的な空間を超えて西洋の文化空間の中で読まれるようになったのである。

漱石の『方丈記』理解は、ディクソンの英訳と論文を通じて欧米に伝播し、英米の読者に継承されていった。ただし、上述した英米の『方丈記』の読者は、受動的にディクソンの理解を受け継いだのではなく、それぞれが置かれた特定の歴史的・社会的状況から影響を受けながらそれを継承したのである。例えば、日本美術商に従事していた高柳らは、欧米で日本文学の知識を広め、日本美術の市場開拓を目的として*Sunrise Stories*を著した。また、同書における『方丈記』ないし鴨長明の描写では、西洋の文化的な規範に応えた戦略が採用されたこともわかる。というのは、作者らは英米で知られていない日本中世期の人物である鴨長明を、西洋で著名であったアメリカの自然崇拝者ソローと比較することで、西洋の読者が長明の人物像を容易に受け入れることを目指したのである。それと同時に、高柳は外国人による日本文学の捉え方が西洋中心的なものであったことを意識し、近代国家として台頭しつつあった日本の世界秩序における新たな地位の模索を背景に、鴨長明が西洋の文人や思想家よりも優れていたと主張している。

同様に、熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳の場合、その題目はディキンズが決めたと思われるが、ディキンズもまた高柳らの著書から単にその長明像を受け継いだのではなく、ソローの名称を題目にすることで、西洋で重要な存在であったソローを通じて欧米の読者の注目を引きつけようとした。他方、デイヴィスによる鴨長明の捉え方は、いわゆる東洋趣味の風潮から影響を受けたものであった。すなわち、20世紀初頭のイギリスにおける異国趣味の影響で、他の東洋の国々と同じく日本に関してもエキゾチックな国というイメージをもっており、そのために鴨長明を日本の偉大な自然崇拝者として解釈したのである。ディキンズ及びデイヴィスによる鴨長明の解釈は、ダムロシュの示した世界文学の三つ目の特徴に当たる。両者は日本中世の文学作品であった『方丈記』に強い関心を抱きながら、その作者である長明については対峙的な姿勢を取り、長明を西洋人物の視点から理解しようとした。

このように、19世紀末から20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容は、ダムロシュが指摘した通り、文学作品が翻訳などを通して世界文学の領域へ入るとき、いかに多様な方法で読まれるのかを示す一つの事例である。言うまでもないが、欧米における『方丈記』の解釈は本稿で論じた一種類のみではない。実は、自然文学作品としての『方丈記』の解釈はここで取り上げた英米の読者のみに限られていた。なぜなら、この期間に行われた本作品のフランス語やドイツ語訳などは、従来から注目されていた『方丈記』の隠

遁文学のテーマに着目したものだったからである。『方丈記』が異なった時代と空間において英語以外の他の言語でいかに受容されたのかを併せて明らかにすることを今後の課題として本稿をここで終えたい。

※本論文は、サントリー文化財団二〇一八年度「外国人若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（サントリーフェローシップ）」の研究成果の一部である。